報道発表

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和７年３月３日

令和６年度（第 75 回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定

文化庁では、昭和２５年から毎年度、芸術各分野において、国内若しくは国内外において優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。この度、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

１．趣旨

芸術各分野において、毎年、国内若しくは国内外において優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

２．部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術Ａ、美術Ｂ、メディア芸術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論の１２部門（大臣賞・新人賞ともに各部門原則として２名以内）にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には１２０万円、新人賞には８０万円の賞金が贈られます。

３．贈呈式・祝賀会

３月１１日（火）都内ホテルにおいて行います。

４．取材申込について

取材を御希望の報道関係者は、３月７日（金）正午までに別紙取材申込書に必要事項を記載の上、電子メールにてお送りください。
※贈呈式の詳細な時間、場所については事前登録の御連絡を頂いた際にお知らせします。（セキュリティーの都合上、贈呈式の詳細な時間、場所については、式終了後まで公表しないようにお願いします。）

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付
参事官補佐：吉野　千津（内線 2084）
舞台芸術係：草野　美音（内線 4782）
電話：０３－５２５３－４１１１（代表）
０３－６７３４－４７７６（直通）

令和6年度（第75回）芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：24名　文部科学大臣新人賞：22名と2組】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	浅野（アサノ） 和之（カズユキ）	俳優	「What If If Only—もしも もしせめて」「リア王」の成果
		坂東（バンドウ） 彌十郎（ヤジュウロウ）	歌舞伎俳優	「髪結新三（カミユイシンザ）」家主長兵衛（イエヌシチョウベエ）ほかの成果
	新人賞	江口（エグチ） のりこ	俳優	「ワタシタチはモノガタリ」「リア王」の成果
		藤田（フジタ） 俊太郎（シュンタロウ）	演出家	「リア王の悲劇」「VIOLET」の成果
映画	大臣賞	石井（イシイ） 岳龍（ガクリュウ）	映画監督	「箱男」の成果
		土井（ドイ） 敏邦（トシクニ）	映画監督	「津島　福島は語る・第二章」の成果
	新人賞	河合（カワイ） 優実（ユウミ）	俳優	「ナミビアの砂漠」「あんのこと」ほかの成果
		三宅（ミヤケ） 唱（ショウ）	映画監督・脚本家	「夜明けのすべて」の成果
音楽	大臣賞	岡村（オカムラ） 慎太郎（シンタロウ）	地歌箏曲演奏家	「岡村慎太郎　地唄箏曲（ジウタツウキョク）演奏会」ほかの成果
		阪（バン） 哲朗（テツロウ）	指揮者	「ばらの騎士」ほかの成果
	新人賞	北村（キタムラ） 朋幹（トモキ）	ピアニスト	CD「リスト 巡礼の年 全3年」ほかの成果
		長谷川（ハセガワ） 将山（ショウザン）	都山流尺八演奏家	「B→C 264 長谷川将山（尺八）」の成果
舞踊	大臣賞	尾上（オノエ） 紫（ユカリ）	日本舞踊家	「第7回尾上紫リサイタル—花—」の成果
		柄本（ツカモト） 弾（ダン）	バレエダンサー	「ザ・カブキ」「ロミオとジュリエット」ほかの成果
	新人賞	スズキ 拓朗（タクロウ）	振付家・ダンサー・演出家	おどるシェイクスピア「PLAY!!!!! ～夏の夜の夢～」ほかの成果
		中村（ナカムラ） 鷹之資（タカノスケ）	歌舞伎俳優・日本舞踊家	「第九回翔之會（ショウノカイ）」の成果
文学	大臣賞	野木（ノギ） 京子（キョウコ）	詩人	「廃屋の月」の成果
		町屋（マチヤ） 良平（リョウヘイ）	小説家	「私の小説」の成果
	新人賞	井戸川（イドガワ） 射子（イコ）	小説家・詩人	「無形」の成果
		西村（ニシムラ） 麒麟（キリン）	俳人	「鷗（カモメ）」の成果
美術A	大臣賞	石田（イシダ） 尚志（タカシ）	美術家	「石田尚志　絵と窓の間」展の成果
		塩田（シオタ） 千春（チハル）	美術家	「塩田千春　つながる私（アイ）」展ほかの成果
	新人賞	青山（アオヤマ） 悟（サトル）	美術家	「青山悟　刺繍（シシュウ）少年フォーエバー」展ほかの成果
		笹井（ササイ） 史恵（フミエ）	漆芸家	笹井史恵 漆芸展「風様（カゼサマ）ふわり、忽（タチマ）ちに雷様（カミナリサマ）」ほかの成果
美術B	大臣賞	開発（カイハツ） 好明（ヨシアキ）	現代美術家	「ART IS LIVE —ひとり民主主義へようこそ」展の成果
		金築（カネチク） 浩史（ヒロシ）	展覧会エンジニア	「札幌国際芸術祭2024」ほかにおけるエンジニアリングの成果
	新人賞	金仁淑（キムインスク）	アーティスト	「Eye to Eye」ほかの成果
		Nerhol （田中（タナカ） 義久（ヨシヒサ）） （飯田（イイダ） 竜太（リュウタ））	現代美術家	「水平線を捲（メク）る」展ほかの成果
メディア芸術	大臣賞	青山（アオヤマ） 剛昌（ゴウショウ）	漫画家	「名探偵コナン」の成果
		桜井（サクライ） 政博（マサヒロ）	ゲームクリエイター	「桜井政博のゲーム作るには」の成果
	新人賞	押山（オシヤマ） 清高（キヨタカ）	アニメーター・アニメーション監督	映画「ルックバック」の成果
		橋野（ハシノ） 桂（カツラ）	ゲームクリエイター	「メタファー：リファンタジオ」の成果
放送	大臣賞	阿部（アベ） サダヲ	俳優	「不適切にもほどがある！」の成果
		村瀬（ムラセ） 史憲（フミノリ）	プロデューサー	「掌（テノヒラ）で空は隠せない～1926木本事件～」ほかの成果
	新人賞	上田（ウエダ） 大輔（ダイスケ）	ディレクター	「さまよう信念 情報源は見殺しにされた」の成果
		大島（オオシマ） 隆之（タカユキ）	ディレクター	「“一億特攻”への道 ～隊員4000人 生と死の記録～」の成果
大衆芸能	大臣賞	立川（タテカワ） 談春（ダンシュン）	落語家	「芸歴40周年記念興行　立川談春独演会」ほかの成果
		柳家（ヤナギヤ） 喬太郎（キョウタロウ）	落語家	「喬太郎企画ネタ尽きました、お客様決めてください」ほかの成果
	新人賞	坂本（サカモト） 頼光（ライコウ）	活動写真弁士	寄席定席における活弁の芸ほかの成果
		渡邊（ワタナベ） 琢磨（タクマ）	作曲家	映画「ナミビアの砂漠」「Cloud クラウド」ほかにおける音楽の成果
芸術振興	大臣賞	広上（ヒロカミ） 淳一（ジュンイチ）	指揮者	能登半島地震の被災地における音楽による復興支援活動の成果
		丸岡（マルオカ） ひろみ	横浜国際舞台芸術ミーティングディレクター	「横浜国際舞台芸術ミーティング2024」ほかの成果
	新人賞	小川（オガワ） 希（ノゾム）	Art Center Ongoing代表	「芸術激流2024 ラフティング＋アート」ほかの成果
		松田（マツダ） 崇弥（タカヤ） 松田（マツダ） 文登（フミト）	ヘラルボニー代表取締役/Co-CEO	「HERALBONY Art Prize 2024」ほかの成果
評論	大臣賞	有木（アリキ） 宏二（コウジ）	香雪美術館学芸部長	「ゴーガンと仏教」の成果
		片山（カタヤマ） 杜秀（モリヒデ）	慶應義塾大学教授	「大楽必易（タイガクヒツイ）—わたくしの伊福部昭伝（イフクベアキラ）—」の成果
	新人賞	高橋（タカハシ） 義彦（ヨシヒコ）	北海学園大学准教授	「ウィーン1938年最後の日々—オーストリア併合と芸術都市の抵抗」の成果
		林（ハヤシ） 淳（ジュン）	京都文化財団主任	「いびつな「書の美」 日本の書がたどった二つの近代化」の成果

※敬称略・部門内50音順

令和6年度（第75回）芸術選奨
文部科学大臣賞　贈賞理由

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	浅野　和之	短編ながら「What If If Only—もしも　もしせめて」での演技は激賞ものであった。若い頃から卓越していた身体能力の高さは今なお健在。そのキレのある身体を駆使しながら、主人公の「未来」と「現在」という難しい二つの役柄を軽やかに、かつ深遠に演じてみせた。また、「リア王」では両目を抉（えぐ）られるという悲惨な「グロスター伯爵」を、一転して抑制を利かせた身体で淡々と演じ、その中にどこまでも揺るがない忠義心と深い悲しみとを色濃く滲（にじ）ませた。正に、名演技は身体を伴ってこそ人の心を打つ。その証左となる稀有（けう）な俳優であろう。
演劇	坂東　彌十郎	長身で押し出しが良く、敵役から老け役までを幅広く演じる。「髪結新三」の家主長兵衛では小悪党の新三を掌で転がすような強（したた）かな家主を巧（たく）みに描き出し、「義経千本桜（よしつねせんぼんざくら）」の「すし屋」では全てを飲み込んだ梶原景時（かじわらかげとき）の底知れなさを感じさせた。また「伊勢音頭恋寝刃（いせおんどこいのねたば）」のお鹿では、可笑（おか）しみと愛らしさに加えて哀愁を漂わせた。線の太い立役（たちやく）として、古典と新作で主役から脇役までますますの活躍が期待される。
映画	石井　岳龍	石井岳龍氏の映画「箱男」は、生誕100年を迎えた世界的作家の映像化困難と言われた代表作に基づいている。原作の持つアンチロマン的な企図を十分に活（い）かしつつも、紛れもなく石井映画としか言いようのない実験性と娯楽性が巧（たく）みにブレンドした、独自のアクション映像空間に昇華させた。半世紀近くにわたり、日本映画の枠を超えた奔放な想像力と映像表現で唯一無二の創作活動を続けてきたことも含め、円熟味を増した本作の成果を高く評価したい。
映画	土井　敏邦	NHKや民放で多くのドキュメンタリー番組を発表し、「沈黙を破る」「福島は語る」など秀（すぐ）れた記録映画を撮ってきた監督土井敏邦氏は、大震災時の原発事故で、大量の放射性物質が降り注ぎ、100年は帰還困難と言われた福島県東部・津島の人々の記憶と感情を長期にわたって誠実に取材し、全9章、3時間を超える圧巻の秀作「津島　福島は語る・第二章」に結実させた。災禍の時代の中で、日本と世界に通底する主題を見事に提示した、その功績に敬意を表したい。
音楽	岡村　慎太郎	令和6年の岡村慎太郎氏の活動には、助演においても主催公演においても飛躍があった。「根曳（ねびき）の松」では、地歌が持つ闊達（かったつ）なエネルギーと三曲合奏の楽しさを生き生きと伝え、「早舟（はやふね）」では地歌の原点としての三味線組歌（くみうた）の魅力を示した。「残月」では、繊細な節回しを歌い込み、箏（そう）の音色を美しく響かせて、哀感にあふれる詞章の世界と快活にも感じられる音楽性をうまく調和させた。楽器の響きと作品の音楽性を深く追求し、共演者とのバランスも保つ氏の活動の奥行きと幅の広さが高く評価された。
音楽	阪　哲朗	ドイツのオペラ劇場で長く活躍してきた阪哲朗氏は、びわ湖ホール芸術監督として初めてのプロデュースオペラ公演であるリヒャルト・シュトラウス「ばらの騎士」で、オーケストラを室内楽のように響かせ、台本のすみずみまで明快に聴かせることで、作品を「ドラマ」として響かせた。この手腕は山形交響楽団とのヴェルディ「椿姫（つばきひめ）」でも聴衆を魅了し、京都市交響楽団の定期演奏会（ブラームスとドヴォルザーク）では、オーケストラを東欧的な陰影で染め上げ、奔放なリズムでエキサイティングな演奏を聴かせた。
舞踊	尾上　紫	上演の2曲ともに、確かな技術に裏打ちされた「抑制された型の中からの内面描写」に優れ、日本舞踊の魅力を十分に見せた。流儀に伝わる振付の清元(きよもと)「熊野（ゆや）」では、平宗盛（たいらのむねもり）と熊野のそれぞれの複雑な胸中と美しい春の情景とを品格ある所作で紡ぎ、作品の情緒を堪能させた。長唄「娘道成寺（むすめどうじょうじ）」は、この曲の表現として大切な段ごとの変化と娘の思いを、緩急自在ながらも要所を押さえた動きの中に醸し出し、洗練された舞台に仕上げた。今後も日本舞踊の深みを示す、更なる活躍が期待される。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	柄本　弾	柄本弾氏は平成20年東京バレエ団入団、同22年「ラ・シルフィード」「ザ・カブキ」で主役に抜擢され成功を収めた後、古典バレエから現代バレエまで多くの作品で主役を務め成果を上げた。60周年を迎えたバレエ団における氏の実績は高く評価できる。令和6年は特にクランコ版「ロミオとジュリエット」ロミオ役、ベジャール振付「ザ・カブキ」由良之助（ゆらのすけ）役で、ドラマチックな演技力とキレのあるテクニックで説得力ある作品に仕上げていたことは大いに評価される。
文学	野木　京子	日常の認識や感覚に生じる亀裂を直視し、不安や哀（かな）しみ、違和感や喪失感と向き合う言葉を探究する。野木京子氏の「廃屋の月」はそうした営為から生まれた詩集だと言える。詩を書く意味を「知らない廃庭か廃屋に入っていくこと」と重ねる視点は、人間と言葉との関係を真摯に見詰める心の在り方を映す。水母（くらげ）や樹木や死者に目を向け、耳を傾け、世界の奥行きを暗示する。詩の深さと歓（よろこ）びを示す豊かな実りであり、受賞にふさわしい。
文学	町屋　良平	「私の小説」は五つの作品（「私の文体」「私の労働」「私の推敲（すいこう）」「私の批評」「私の大江（おおえ）」）からなる短編集。タイトルが示すように、書くべき対象としての「私」に過剰に拘泥（こうでい）しながらも、架空作家からの「引用」や、妄想とユーモアをたっぷりまぶした作品は、書く主体としての「私」を批評する冴（さ）えた目に貫かれている。優れて自己言及的なフィクション（異形の「私小説」）によって、日本文学の「伝統」を刷新した功績は大きい。
美術A	石田　尚志	身体的な行為の痕跡としてのドローイングで知られる石田尚志氏は、個展「絵と窓の間」において、絵具の層として重ねられていく絵画が、時間の層を内包する存在である意味を、制作過程の映像とキャンバスや壁画で構成するインスタレーションを通し提示した。また葉山の海に面した光差し込む展示室で会期中手掛けた壁画制作は、窓外の水平線の延長上に展開し、自然空間の時の流れと呼応する絵画への新たな取組ともなった。絵画と映像、物質とイメージ、空間と光の関係をめぐる40年に及ぶ考察と実践を、展示空間において鮮やかに示した意義は高く評価されるものである。
美術A	塩田　千春	大阪中之島美術館で開催された個展「塩田千春 つながる私（アイ）」は、これまで氏が追求してきた「生きること」「存在の意味」というテーマに加え、パンデミックの時代を経て、人が生きる上で不可避の社会的な関係性という視点からアプローチした新作が出品されるなど、作家としての充実度の高さを示す内容だった。また中国、トルコ、チェコでの個展も開催され、生と死という根源的な問いを鮮やかでダイナミックなインスタレーションとして昇華させる氏の作品は、洋の東西を問わない普遍的テーマを探求する奥行きの深さゆえに、国際的にも広く認知されている。
美術B	開発　好明	開発好明氏は1990年代から、美術という枠を超え、社会の中で何かを起こす多種多様な作家活動を街中やアートフェスティバル、被災地等で行ってきた。展示可能な作品という形で残る表現が少なく、30年以上のキャリアの全貌の把握は困難だったが、個展「ART IS LIVE ―ひとり民主主義へようこそ」において、過去記録に加え、現在進行形の作家活動を展開、鑑賞者が自（おの）ずと参加者へ、さらに行為者となっていく構造を創出した。ほぼ毎日、何かが生じる展示への能動的参加を通して、作家が継続して行ってきたこと―一人一人の存在が社会を動かし、変え得る原動力となるという気付きをもたらした。
美術B	金築　浩史	90年代から展覧会エンジニアとして、作品の設営、技術サポート、メンテナンスなどを通じて多くのアーティストやキュレーターと協働し、展覧会の成功に貢献してきた。アーティストのビジョンを実現するため、最適な機材の選定や設置方法を提案することで、作品の魅力を最大限に引き出す役割を果たし、金築浩史氏が手掛けた展示は「カネチック・アート」と呼ばれるほど、この分野で高い信頼を得ている。近年は、若手アーティストや技術者の育成にも力を注いでいる。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	青山　剛昌	「名探偵コナン」は今や国民的作品である。アイデアの質と量を問われる推理ものでありながら、多彩なキャラクターの魅力も加わり、高い人気を保ち続け、令和6年には連載30周年を迎えた。青山剛昌氏は平成8年からスタートしたアニメ、特に平成9年から公開が始まった劇場版にも深くコミット。劇場版も令和5年、令和6年には連続して興行収入100億円を超える大ヒットを記録した。長期にわたって良質のエンターテインメントを創出したその業績を讃（たた）えたい。
メディア芸術	桜井　政博	これまで桜井政博氏が培ってきたゲーム制作の知見を広く共有し、ゲーム業界の発展に大きく寄与したことが理由である。YouTubeを通じて、分かりやすく、一貫したストーリー性を持った親しみやすい形で公開したことで、ゲーム制作に関心のある若者だけでなく、幅広い層へと伝わっていった。また、英語版も公開されており、国内にとどまらず、海外でもその影響が波及しており、今回、芸術選奨を受賞するに当たって十分な功績を残したと考える。
放送	阿部　サダヲ	極端にデフォルメされた昭和時代をコミカルかつ自然に演じ切っている。時にクスッと笑える演技も交え、令和の人々を説得するかのように話を詰めていく演技には目を見張るものがある。また、このドラマ特有の毎回終盤に訪れるミュージカル仕立てのシーンも、役柄のイメージを崩すことなく踊り切っている。その後に現実のシーンに戻った際にも、不自然さがなくストーリーに戻す演技力は圧巻である。台詞（せりふ）回しやイメージ作りが難しいオリジナル脚本を、見事なまでに演じている。
放送	村瀬　史憲	村瀬史憲氏を中心とする取材チームは、1本の番組を発火点として取材を継続し、枝分かれさせ、さらに何本もの作品に結実させていく。例えば「防衛フェリー～民間船と戦争～」（平成29年）や「面会報告～入管と人権～」（令和2年）では、これらの作品を皮切りとして同じテーマの秀作を次々に放送し続けた。「掌で空は隠せない～1926木本事件～」はおよそ100年前に発生した朝鮮人労働者の虐殺事件を検証した作品。事件を振り返ると同時に、現代での和解への希望を描いた。この作品を発火点に村瀬組は次にどんな果実を実らせるのか。
大衆芸能	立川　談春	芸歴40周年記念興行「立川談春独演会」、ネタ出し40席、一席目は前座噺（ぜんざばなし）や“随談（ずいだん）”という構成で、東西で開催された。登場人物の心情を、時に台詞（せりふ）の中で、時に地に戻って掘り下げ、観客の感性に問う。美しい言葉選び、落語という形式で己の芸を作った。しかし師匠立川談志（たてかわだんし）が垣間見(かいまみ)えて、やはり落語であると主張をしているかのようだ。この数年の孤高ではない活動が、かえって己の一席を磨いた。牽引力（けんいんりょく）としてのこれからを期待する。
大衆芸能	柳家　喬太郎	古典か新作か、人情噺（にんじょうばなし）か滑稽噺（こっけいばなし）か、と分けたがる落語だが、柳家喬太郎氏の落語はそれぞれの良さを活（い）かしたまま現代的思考で掘り下げ、見事な構成力で「壁」を壊しつつ、エンターテインメント性豊かな作品に昇華させる。上野・鈴本演芸場での企画公演は、言わば藤山寛美（ふじやまかんび）が挑んだ「リクエスト公演」の落語版。だが、ただの人気ネタの再演ではなく、今を生きる世代に伝わるよう工夫を凝らし、圧倒的な引き出しの多さと懐の深さを見せつけた。
芸術振興	広上　淳一	オーケストラ・アンサンブル金沢のアーティスティック・リーダー広上淳一氏は、避難所、病院、小学校、交流施設、道の駅など、被災者の日常に音楽を届ける活動を被災後直ちに展開。こうした訪問コンサートを今後も「5年、10年のスパンで続ける」としている。本活動では、地域に根ざして育まれてきた文化が、実質的に芸術家と市民が双方向で支え合う円環を形成しており、共生社会における今後の芸術文化活動の展開に多くの示唆を与えるものとなっている。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	丸岡　ひろみ	横浜国際舞台芸術ミーティング（YPAM）のディレクターとして、国内外のアーティストやプロデューサー、観客が出会う公演やミーティングを通じて舞台芸術の国際交流の発展と日本の舞台芸術を国内外に発信するプラットフォームの確立に尽力してきた。パンデミック期を柔軟な戦略により乗り越え、令和6年は、アジア/オセアニア、欧州地域の国際フェスティバルの現在と未来をテーマとしたシンポジウムの開催や、全体プログラムの強化、国内外からの参加者の増進、地域における舞台芸術環境の向上に取り組み、日本における舞台芸術の更なる発展とプレゼンスの向上に寄与した。
評論	有木　宏二	西洋近代文明から逃れ、南洋の仏領ポリネシアで見出（みいだ）した野生の美を絵画に具現したポール・ゴーガン。「ゴーガンと仏教」はそんなイメージを見事に崩壊させる。仏訳された仏教教典を通じてブッダの教えに導かれた画家が、資本主義の欲望と人間の業に抗（あらが）い、「解脱」を求めて苦闘し続けた痕跡を鮮やかに読み解いていく。アジア発の新しいゴーガン像を誕生させた著者の力業を高く評価したい。正に現在が待ち望む問題提起の書である。
評論	片山　杜秀	「大楽必易―わたくしの伊福部昭伝―」は、作曲家伊福部昭との長年にわたる交流を基に、氏の言葉を再現しながらその生涯の軌跡を辿（たど）るものである。人生の細部に分け入って本心に迫ったかと思えば、その細部を日本と世界の社会情勢から俯瞰（ふかん）し意味付けていく。氏の音楽の音階やリズムをも蘇（よみがえ）らせる文章からは、映画「ゴジラ」の音楽だけではない、世界の中に位置付けられる伊福部作品の世界が明瞭に見えてくる。「西洋」や「中央」におもねらず、北海道での原体験を基に作曲に邁進（まいしん）したという氏の足跡を語る本書は、近代の価値観をも再考させる示唆に富む一書となっている。

令和6年度（第75回）芸術選奨
文部科学大臣新人賞　贈賞理由

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	江口　のりこ	「ワタシタチはモノガタリ」では、小説家になる夢を抱いてWebライターを続けてきた40歳の独身女性を等身大の演技で見せ、一貫して関西弁を使用した。キレの良い、時に素っ気なく響く発話が笑いを誘ったが、そこには深い情感、繊細な心の揺れが確かに滲（にじ）んでいた。一方、シェイクスピア劇「リア王」では父親を裏切る長女ゴネリルを印象的に表現した。働く女性でも王女でも、それぞれに存在感を示す稀有（けう）な俳優である。多彩な役柄での一層の活躍が期待される。
演劇	藤田　俊太郎	ストレートプレイとミュージカル、いずれにおいても一歩踏み込んだクリアな解釈を行い、骨太なメッセージをエンターテインメントに昇華させている。初めてのシェイクスピア作品「リア王の悲劇」においても、使用する戯曲のバージョン選択から周到な準備に努め、根拠を示した上で、現代の価値観とコンプライアンスに依拠した明快なアップデート版を提示してみせた。「新人」の呼称にふさわしいのは年齢のみの、現代演劇界のトップランナーである。
映画	河合　優実	24歳の若さで、既にスケールの大きさと表現の繊細さを兼ね備えた俳優が現れた。主演の2本「あんのこと」「ナミビアの砂漠」では、必ずしも観客の共感を得るタイプの人物ではないにもかかわらず、いとおしささえ感じる魅力的な造形をしてみせた。氏以外の俳優が演じたら、全く異なる印象の作品になっていただろう。役柄が難しければ難しいほど力を発揮する氏は、作品のクオリティーを上げることのできる俳優である。
映画	三宅　唱	三宅唱氏は、現代日本を代表する新たな世代の映画監督の一人として、既に着実に地歩を築いてきた。「夜明けのすべて」は、原作小説の世界を丁寧に活（い）かしながら、初期作以来、若者たちの群像劇をみずみずしく描き出してきた氏の作品世界の一つの到達点を示した。撮影に用いた16ミリフィルムも豊かな映画世界と合致して素晴（すば）らしい効果を上げている。令和6年の日本映画の最良の成果である本作からは、今後の氏の更なる飛躍が存分に窺（うかが）える。
音楽	北村　朋幹	磨き抜かれた水晶を思わす響きで、どんな細部をも漫然と弾き飛ばさず、確たる解釈を聴かせる北村朋幹氏。そのピアニズムが、リスト作曲「巡礼の年」全曲を収めたディスクにおいて、一つの頂点に達した。グリーグ、ノーノほかの作品を併録するセンス、並びにそれら楽曲とリストとの関連について述べた自身による解説文も非凡というほかない。旺盛な公演活動では、フォルテピアノ演奏でも秀でていることをこの令和6年に初めて披露した。美的にも知的にも余人を圧倒する音楽家の出現を、言祝（ことほ）ぎたい。
音楽	長谷川　将山	「都山流におけるヴィルトゥオジティー（名技性）」と「尺八の器楽的可能性」の二つを軸とする二部構成の演奏会は、企画力の高さとともに、新進気鋭の若手尺八家としての希有（けう）な実力を鮮烈に印象づける内容であった。尺八の“現在”に果敢に挑戦し、超絶技巧と高い表現力を駆使した長谷川将山氏の演奏には、想像を超える尺八の可能性が広がっていた。同時に、虚無僧（こむそう）の法器という歴史が培ってきた尺八の精神性と尺八本来の深淵（しんえん）な音色も輝いていた。将来の活躍を大いに期待できる新人として評価できる。
舞踊	スズキ　拓朗	主宰するダンス・カンパニーCHAiroiPLINで深い文学性に裏打ちされた新作をコンスタントに発表するほか、テレビ、ミュージカル等でも活躍し、現在最も注目される若手振付家の一人である。令和6年は、「おどる落語「らくだ」」「おどる絵本「じごくのそうべえ」」、連続して取り組んでいるシェイクスピア戯曲から「おどるシェイクスピア「PLAY!!!!!～夏の夜の夢～」」ほかを上演。稚気に富むと同時に繊細、また驚くべき独創性と同時代性やユーモアをもって古典を再解釈し、大きな成果を挙げるとともに今後の更なる飛躍を期待させた。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	中村　鷹之資	中村鷹之資氏は、25歳という若さであるが自身の勉強会を既に9回重ねている。今回は「二人三番叟」（ふたりさんばそう）の三番叟を狂言の野村裕基（のむらゆうき）氏と共演ではつらつとした好演を見せ、歌舞伎舞踊狂言取り物の傑作「棒しばり」では次郎冠者（じろうかじゃ）を力演し圧倒的な評価を得た。文部科学大臣新人賞にふさわしい清新な舞台は、爽やかな印象を観客に与え、舞踊界にも大きな刺激となったことだろう。
文学	井戸川　射子	井戸川射子氏の「無形」は、海に面する団地を舞台にして、立ち退（の）きを迫られている老若男女（ろうにゃくなんにょ）の住民たちの姿を描いた作品だが、独特の句読点の打ち方、切れ目を感じさせない焦点人物の切り替えといった新しい手法によって、変わらないものと変わるもの、形のあるものと形のないものを言葉で表現することに成功している。言語芸術としての小説にしか表現できないものを絶えず追求しようとする姿勢は高く評価でき、今後の更なる可能性も期待させる点で、文部科学大臣新人賞にふさわしい。
文学	西村　麒麟	西村麒麟氏の句集「鷗」は生き物の句が、まず魅力的である。「やどかりの小さき顔が脚の中」「後列の頑張つてゐる燕（つばめ）の子」「放屁虫（へひりむし）後ろの足をひよいと上げ」。よく観察して、その生き物をいきいきと捉え得ている。その生の可憐（かれん）さまでを感じさせている。「インバネス死後も時々浅草へ」といった不思議が表れている句も貴重である。図太い心と細やかな表現力で、俳句に新しい世界をもたらす可能性をもった作者だ。
美術A	青山　悟	資本主義、労働価値、暴動、ジェンダー問題…青山悟氏はこのような現実的で過酷な課題の歴史を精査し、そこから炙（あぶ）り出される違和感と疑義を作品化することで現代を明快に問う作家である。過去と現在を繋（つな）げ、見る者を思考させる力とユーモアを持っている。令和6年春の「青山悟　刺繍少年フォーエバー」展は氏の実力を見せる良い機会となった。氏は絵画や彫刻という分野には収まらない刺繍表現を目覚めさせた。この稀有（けう）で知的な手作業を、現代の芸術まで昇華させた功績が高い評価に繋がった。
美術A	笹井　史恵	布や和紙貼りした土台となる形状に漆を塗り磨き上げる乾漆の技法により、生命感溢（あふ）れる造形を生み出す。数年来手掛ける色漆は笹井史恵氏自身の調合によるものだが、単色から多色へと色重ねを試みることで造形を形から一変させた。一見ポップに見えるその配色と捉えどころのないフォルムは、日本の色と自然や歴史的景観の中から抽出されたものであり、いずれの作からも日本に根付いてきた伝統と風土が香る。戦後、美術の土壌で彫刻的であることを求められてきた日本の工芸に、これら作品群は改めて現代の工芸としてあるべき必然性を示してくれる。
美術B	金仁淑	金仁淑氏はこれまで歴史や伝統における共同体、個の関係性、アイデンティティ一等を主題に、作品を多数制作してきたが、令和6年は取材・制作を継続してきた題材を一層数多く、連続して展示した年となる。とりわけブラジルルーツの児童受入れを行う私立保育・教育施設で出会った子供を丁寧に取材した「Eye to Eye」では、被写体をほぼ原寸大で投影するモニターを点在させ、その間を鑑賞者が巡り歩く空間を作り出し、個と個の出会いや関係を再考させた。今後も歴史認識や社会的背景の枠組みを超えて、私たちが目前の事象や個人と真摯に向き合うきっかけとなるような作品を期待している。
美術B	Nerhol （田中　義久） （飯田　竜太）	グラフィックデザインを基軸とする田中義久氏と彫刻家の飯田竜太氏という、専門領域の枠を超えた両氏の対話を起点とする表現活動を展開しているNerhol。連続イメージを積層し、手で「彫る」ことで時間と空間の多層性を探る代表作をはじめ、自然環境と人間社会、静止と移動、可視性と不可視性など様々な境界を行き来するようにして複雑に絡み合っている事象を掘り起こし、切り開いている。大規模個展「Nerhol 水平線を捲る」は17年間の活動の変遷やその深化を示しただけでなく、理解できないことを覆うものを捲り上げて新たな地平を探ろうとする彼らの更なる活躍を大いに期待させる力に満ちていた。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	押山　清高	「鋼の錬金術師 嘆きの丘の聖なる星」でアニメーションディレクターとして大きな働きを見せた押山清高氏は、その後、演出にも仕事を広げ、「ルックバック」は監督第2作に当たる。原作を丁寧に読解（どっかい）した演出に加え、本作の原画の大半を一人で描くことで、「描く人」を主題とする原作の精神を見事に画面に定着させた。中でも主人公・藤野が雨中をスキップするシーンは、アニメ史上に残る名シーンである。今後の躍進を期待したい。
メディア芸術	橋野　桂	現代を舞台にしたRPG「真・女神転生」をリブランディングした「ペルソナ」シリーズ3作目以降のプロデュース、ディレクションを歴任。スタイリッシュなルック、軽快なテンポでグローバルに若い世代の支持を集める。授賞対象となった「メタファー：リファンタジオ」では満を持して王道ファンタジーの完全新作に挑み、瞬く間に全世界で100万本を突破。漫画、アニメのナラティブを進化させたJRPG。間違いなく現代のJRPGの旗手である。
放送	上田　大輔	弁護士資格を持ち、関西テレビの法務部勤務から、報道局へ異動。その後、「引き裂かれる家族～検証・揺さぶられっ子症候群」、「逆転裁判官の真意」などでテーマ性、クオリティーともに高い作品を作り上げ、ベネチアテレビ賞などで入賞を果たしている。令和6年の「さまよう信念 情報源は見殺しにされた」でも、時代から忘れられそうな事実に、弁護士であるディレクターならではの視点で切り込み、独自の作品に仕上げている。今後も様々な題材に挑んでほしいディレクターである。
放送	大島　隆之	「“一億特攻”への道～隊員4000人 生と死の記録～」は15年にわたりこのテーマを取材してきた大島隆之氏の到達点を示す番組である。探し出せる限りの元搭乗員の証言を記録し、全国400か所の遺族を訪ね歩いた。地を這（は）うような取材から「特攻熱」とも言うべき国を挙げての熱狂が見えてくる。人々が特攻に「希望」を見出し、メディアが増幅し、現実とかけ離れた妄想が社会を支配していく。その不気味なメカニズムは現代にも重なる。今後、特攻を論じる際に必ず参照されるべき作品である。
大衆芸能	坂本　頼光	寄席定席公演に映像投影を持ち込んだ努力により「活動写真弁士」が身近になり、存在感が再認識された。寄席演芸に一つのジャンルを増やしたばかりでなく、無声映画説明の随所に笑いをちりばめる。自作アニメ、古い映画の名場面に声色を駆使するオリジナリティー。ナレーションでも情報伝達に弁士の個性と知見を加える。素材を買い集めて次世代へ繋（つな）ごうという熱意からの努力が、語り手としての可能性を拡（ひろ）げる結果となった。元の芸の枠を超える次への展開を期待する。
大衆芸能	渡邊　琢磨	海外でも評価の高い渡邊琢磨氏は、多くの映像作品に音楽を提供してきた。令和6年カンヌ国際映画祭で国際映画批評家連盟賞を受賞し話題になった映画監督山中瑶子氏の「ナミビアの砂漠」、日本を代表する映画監督黒沢清氏の「Chime」「Cloud クラウド」と話題作3作の音楽を担当。クラシカルなオーケストレーションや電子音、ノイズなどの音響系、アンビエントなサウンド・デザインなど様々な手法をイマーシブに駆使する偉才である。既にイギリスを中心に世界でも注目を集める才能だが、彼の手掛ける映像のための作品や音楽作品は今後もその独自の世界観を発展させていくだろう。
芸術振興	小川　希	平成20年、東京・吉祥寺に実験的な芸術表現を追求する芸術複合施設「Art Center Ongoing（アートセンター・オンゴーイング）」を開設。国際的なネットワークを活（い）かした滞在制作プログラムや、芸術祭への企画参加など幅広く活動。令和6年には「芸術激流2024ラフティング＋アート」で、御岳渓谷（みたけけいこく）を会場に、急流を下る観客に現代美術家や詩人らが作品発表を行い、従来の展覧会の枠組みを超えて、表現者と鑑賞者の協力関係の中で成立する作品鑑賞における合意形成の在り方を拡張する活動を展開した。

令和6年度（第75回）芸術選奨 贈賞理由一覧　　【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	松田　崇弥 松田　文登	松田崇弥氏と松田文登氏は、主に知的障害のある作家が手掛けたアートの、社会の中での流通を図るために、平成30年に株式会社ヘラルボニーを起業した。令和6年には「HERALBONY ART PRIZE」を創設したほか、パリにヨーロッパ支社を設立して海外活動の拠点とするという特筆すべき実績があった。著作権管理やライセンス料の適切な設定によって、障害のある作家が自立する道を開くという一見困難な挑戦を積極的にしている点において、高く評価したい。
評論	高橋　義彦	「ウィーン1938年最後の日々―オーストリア併合と芸術都市の抵抗」は、アドルフ・ヒトラーの侵略により、オーストリアが併合され、国家が消滅した事件とその後を描く。当時の首相シュシュニクを軸に、文化人の群像が鮮やかに浮かぶ。爛熟（らんじゅく）した文化が、あっけなく崩壊していくさまを活写する。ヨーロッパの現在を考える上でも貴重な示唆に満ちている。巧（たく）みな構成、飾らない文章、物語る力。批評文芸の優れた達成である。
評論	林　淳	日本の近現代書道史は20世紀半ばに脚光を浴びた前衛書の活動を中心に語られてきた。「いびつな「書の美」 日本の書がたどった二つの近代化」は、こうした「革新派」の影に隠れた「伝統派」にも光を当て、従前のいびつな構造を浮かび上がらせる。双方の制作理念を対比しながら、両派の美学を総合的に俯瞰（ふかん）することで新たな歴史認識を打ち出したのは大きな功績である。しかも、書に関する著者独自の評価軸を示すなど、意欲的な姿勢を見せている。文部科学大臣新人賞にふさわしい力作と言えよう。

令和6年度（第75回）芸術選奨
選考経過

令和6年度（第75回） 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として19名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。いずれも伝統演劇から現代演劇まで、第一線で活躍する俳優・演出家らばかりである。 第一次選考審査会では選考審査員それぞれが推薦理由を述べ、忌憚（きたん）のない意見が交わされた結果、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞7名まで候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、選考審査員たちが更に所見を述べ令和6年の舞台での実績・将来性を検討するなど議論を深めた。いずれも甲乙つけがたい候補者の中から、古典から現代劇までその存在感が観るものに強い印象を遺（のこ）す浅野和之氏、歌舞伎の脇役として時代物・世話物問わず近年頓（とみ）に円熟味を増している坂東彌十郎氏の2名が文部科学大臣賞に選ばれた。文部科学大臣新人賞には、大胆かつ繊細な演技で演劇のみならず映像でも幅広く活躍する江口のりこ氏、ミュージカルからシェイクスピアまで、その切れ味鋭い演出で期待される藤田俊太郎氏の2名が選ばれた。
映画	映画部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として12名が推薦された。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞候補者3名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補として絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。 文部科学大臣賞は、監督、俳優、スタッフそれぞれの功績を吟味しながら、各選考審査員が自身の推薦する候補者について補足説明を行い、それ以外の候補者についても所見を述べ、議論が重ねられた。議論の結果、平成9年に製作が開始されたものの撮影直前に頓挫した「箱男」を諦めず素晴（すば）らしい作品へと結実させた映画監督の石井岳龍氏、 また、丁寧な取材で「津島 福島は語る・第二章」を作り上げたジャーナリストで映画監督でもある土井敏邦氏を評価し、両名を選出することになった。 文部科学大臣新人賞は、「ナミビアの砂漠」「あんのこと」でその演技が国内外で高く評価された俳優の河合優実氏、最新作「夜明けのすべて」で脚色力と繊細な演出力を見せつけた映画監督の三宅唱氏を選出した。
音楽	音楽部門には選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補に11件、また文部科学大臣新人賞にも11件の推薦があった。まず第一次選考審査会において、選考審査員及び推薦委員からの推薦用紙及び口頭における意見を踏まえ、文部科学大臣賞に3件、また文部科学大臣新人賞に4件が候補として絞り込まれた。 更なる業績確認を踏まえて開催された第二次選考審査会においては、活発な議論と公正な審査の結果、文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名が選出された。 阪哲朗氏はオペラ及びコンサートの双方で、長年のドイツでの活動で鍛えた実力を遺憾なく発揮した。岡村慎太郎氏は自身の主催による演奏会において、考え抜かれた選曲と多彩な演奏により、地歌箏曲演奏家（じうたそうきょくえんそうか）の第一人者にふさわしい演奏を聴かせた。 文部科学大臣新人賞の北村朋幹氏は録音と演奏会の双方で、極度の集中力と説得力ある解釈を聴かせた。長谷川将山氏は都山流（とざんりゅう）の古典から現代曲に至るレパートリーで圧倒的な技巧により鮮烈な印象を与えた。
舞踊	舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として13名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。古典作品では正確に伝承しつつも現在の視点で作品を表現しているか、一方、現代舞踊などでは同時代の感性で表現できているかなど慎重に審議し、第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞4名に候補者を絞り込んだ。 第二次選考審査会では、今後の舞台芸術にどのように影響を与えるかなども含め、更に審議を深めていき候補者を絞っていった。その結果「第7回尾上紫リサイタル―花―」における完成度が高い舞台の評価で推薦の多かった尾上紫氏がまずは文部科学大臣賞に選出された。続いて「ザ・カブキ」「ロミオとジュリエット」ほかでドラマチックな演技と高い技術が評価され柄本弾氏が選出された。文部科学大臣新人賞は、スズキ拓朗氏が「おどるシェイクスピア」で著名な演劇作品を現代の視点で読み解き、同時代性と独創性を強く感じられる公演をしたことが高く評価され満場一致で選出。続いて中村鷹之資氏は日本舞踊の演者としても「第九回翔之會」を魅力ある舞台に仕上げ、将来性を感じられたことが高く評価され、同じく満場一致で選出された。

令和6年度（第75回） 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	文学部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に候補者が絞られ、第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。 文部科学大臣賞には「廃屋の月」の野木京子氏、「私の小説」の町屋良平氏が選ばれた。野木氏の詩集は生死の境目の荒涼とした風景を捉えつつ、はっとするようなイメージの飛躍とともに言葉に命を吹き込む魔法のような力があった。町屋氏の短編連作は、意識の暗がりを行きつ戻りつしながら小説執筆の息遣いを伝える作品で、諦観と笑いの奇妙な混淆（こんこう）にも注目が集まった。 文部科学大臣新人賞には、「鷗（かもめ）」の西村麒麟氏と「無形」の井戸川射子氏が選ばれた。西村氏の句集は、飛翔（ひしょう）の軽みを鮮やかに表現し、新時代の俳句の潜在力を示した。井戸川氏の長編小説は超絶技巧とも言える驚くべき手際で、団地の人間模様を描き出しながらも主観や感覚の細部へ末端へと叙述を展開、鮮烈な発見感とともに世界の根源をまぶしく現出させ、高い評価を得た。
美術A	美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者17名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者について推薦理由及び資料を基に審議した上で、文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞5名に絞り込まれた。第二次選考審査会では、今一度、選考審査員がおのおの絞り込んだ作家について推薦理由を述べるとともに討議を繰り返し、複数回の投票の結果ほぼ全員一致により、文部科学大臣賞に石田尚志氏、塩田千春氏の2名が、文部科学大臣新人賞に青山悟氏、笹井史恵氏の2名が決定した。 石田氏はドローイング・アニメーションの手法や映像の作品で知られてきたが、今回の展示では自身の原点である絵画へと落とし込むことへの探求が評価された。ベルリン在住の塩田氏は郷里大阪での初めての大規模個展において「つながる」ことを通して「生」の圧倒的な強さを見せた。青山氏は機械刺繍という表現媒体が持つ多角的視点を背景に、単なる絵画にとどまらない社会的メッセージを発信し続けている。笹井氏は伝統的技法を駆使しながらもその特異な形体と絶妙な調色によって、軽やかなる現代の漆芸表現を切り拓（ひら）いた。
美術B	美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者11名と文部科学大臣新人賞候補者11名が推薦された。第一次選考審査会では、候補者の作品や活動及び推薦理由について、活発な意見交換と審議を経て投票を行い、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について、美術B部門としての展望と理解を深めながら意見交換と慎重な審議を行い、各2回の投票を経て、文部科学大臣賞は開発好明氏と金築浩史氏、文部科学大臣新人賞は金仁淑氏とNerholを選出した。文部科学大臣新人賞の投票では同数が続き苦慮したが、推薦者数を根拠とした判断に至った。 開発氏は30年にわたる多層な作家の全体像において、社会への誠実な対峙（たいじ）を示し得たこと、金築氏は展覧会を支える創造的な技術と姿勢への信頼と、多岐にわたる貢献が高く評価された。金氏は旺盛で真摯な取材力による作品の完成度の高さが、Nerholは対話によって表現領域を複合し、横断していくスタイルの独自性が今後の期待とともに高く評価された。

令和6年度（第75回） 芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
メディア芸術	メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補14名、文部科学大臣新人賞候補14名が推薦され、第一次選考審査会で文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞7名に絞られた。 第二次選考審査会では、文部科学大臣賞候補として、多くの委員が青山剛昌氏の「名探偵コナン」を挙げ、長年にわたり一流のエンターテインメントを世に送り出してきた氏の功績を称（たた）えるとともに、連載30年の節目として今年授賞する意義を確認し、文部科学大臣賞を決定した。また、桜井政博氏の「桜井政博のゲーム作るには」に対して、賞の対象や当分野での“作品”の定義について活発な議論が交わされ、現在の視聴者をターゲットとしたYouTubeチャンネルとしての意義と、教育・啓蒙（けいもう）コンテンツとしての各話のクオリティの高さ、全260話全体の設計の巧（たく）みさ、過去作品のアーカイブの有効な利用法などから、多くの選考審査員が当コンテンツを高く評価し、もう一つの文部科学大臣賞となった。 文部科学大臣新人賞は、それぞれの分野から候補者が挙げられた結果、マンガの原作を生かしつつ、アニメーションならではの表現を追求した作品「ルックバック」で大きな話題を呼んだ押山清高氏と、日本のマンガ・アニメ文化に立脚したテンポ感や動き、ストーリーテリングをゲームに活（い）かし、独自のJRPGを打ち立てた、橋野桂氏に決定した。
放送	放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に12名、文部科学大臣新人賞候補に8名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の活動についての多角的な議論を行い、文部科学大臣賞候補に推薦のあった1名については、これまでの受賞歴、また年齢が40代とまだ若いことから文部科学大臣新人賞候補として扱うこととし、文部科学大臣賞候補6名、文部科学大臣新人賞候補4名に絞った。 第二次選考審査会では、まず、文部科学大臣賞について、選考審査員に第一次選考審査会で絞った候補者の中から改めて推薦してもらい、全ての選考審査員の意見が一致する形で、テレビドラマで活躍する俳優・阿部サダヲ氏と、ドキュメンタリーを手掛けてきたプロデューサーの村瀬史憲氏を文部科学大臣賞に決定した。続いて、文部科学大臣新人賞に関しても同様の審査作業を経た上で、ディレクターの大島隆之氏と上田大輔氏を文部科学大臣新人賞に決定した。両氏とも、ドキュメンタリー系番組の制作での活躍を評価しての選出となったが、こちらも選考審査会に出席した全ての選考審査員の意見が一致しての結果であった。
大衆芸能	大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者14名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞の候補者を6名、文部科学大臣新人賞の候補者を8名に絞り込んだ。 文部科学大臣賞は落語家、講談師と歌手や作曲家などの多彩な候補者が揃（そろ）った。活動実績と推薦理由に基づき選考審査員によって議論がなされた結果、芸歴40周年の節目を迎え、東京と大阪で10か月連続の記念公演を行い、大きな成果を見せた落語家の立川談春氏と、古典と新作の二刀流で人気を博し、全国各地を回る一方で寄席への出演も欠かさず、様々な挑戦を行っている同じく落語家の柳家喬太郎氏が選ばれた。 文部科学大臣新人賞は落語家、活動写真弁士、講談師、漫才師、音楽家ら多種多様な候補が並んだ。活況を見せる多くの才能は甲乙つけ難く、候補者各人の業績などについて多面的で熱い議論が重ねられた結果、活動写真弁士として異才を放つ坂本頼光氏と、映画音楽なども手掛け、将来を大いに嘱望される作曲家の渡邊琢磨氏が選出された。

令和6年度（第75回）芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	芸術振興部門は、文部科学大臣賞14名、文部科学大臣新人賞13名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に絞られ、第二次選考審査会での討議となった。他分野での評価が難しかったり、裏で芸術を支えているために目が向きにくかったりしていたクリエイターやプロデューサーなど、広い視野の下での推薦があり、検証にも多様な視点が必要とされた。そして討議の場では、国内の芸術活動を世界に広めたことや、芸術による社会貢献をした活動への評価が共有された。最終的に文部科学大臣賞は、能登半島地震の被災地支援に音楽活動で尽力した指揮者の広上淳一氏と、舞台芸術の国際交流を推進したディレクターの丸岡ひろみ氏に決定した。また、文部科学大臣新人賞は若手アーティストの支援を独自の手法で実施した小川希氏と、ビジネス面での障害者アートの社会への定着を図るために賞を創設するなどした松田崇弥氏・松田文登氏に決定した。本部門の表彰が、既存の芸術の枠組みにとらわれない人材の顕彰に寄与できれば幸いである。
評論	評論部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として23名、文部科学大臣新人賞候補者として18名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を吟味しつつ慎重に審議を行い、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。 第二次選考審査会では、各候補者の著作について真摯な議論を交わし、文部科学大臣賞に有木宏二氏と片山杜秀氏を選出した。有木氏の「ゴーガンと仏教」は、ゴーガンの画業に仏教思想の深い浸透を見るという野心作で、その洞察を稠密（ちゅうみつ）な実証が裏付けている。片山氏の「大楽必易―わたくしの伊福部昭伝―」は、映画「ゴジラ」の音楽で著名な作曲家の全体像を、主に伊福部本人の談話を基に構成した労作である。 文部科学大臣新人賞は、高橋義彦氏と林淳氏に決定した。高橋氏の「ウィーン1938年最後の日々―オーストリア併合と芸術都市の抵抗」は、ナチスドイツによる併合前後のオーストリアを舞台に政治・文化の大立者（おおだてもの）が交錯する群像ドラマを巧緻に描き、また、林氏の「いびつな「書の美」 日本の書がたどった二つの近代化」は、日本の書を革新派と伝統派に大別して説得力豊かな透視図を築き上げ、ともに高い評価に値する。

芸 術 選 奨 実 施 要 項

令 和　５ 年　４ 月　４ 日
文 部 科 学 大 臣 決 定
一部改正令和　６年　５月２４日

１　趣旨

芸術各分野において、毎年、国内若しくは国内外において優れた業績をあげた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞又は芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって我が国の芸術活動の奨励と振興に資する。

２　部門

（１）　演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
（２）　映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
（３）　音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
（４）　舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
（５）　文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
（６）　美術Ａ（絵画（版画含む）・彫刻（インスタレーション含む）・工芸・書等の作家等）
（７）　美術Ｂ（建築・デザイン・写真・映像・メディアアート・その他の新傾向の作家等）
（８）　メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）
（９）　放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
(10)　大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショウ・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
(11)　芸術振興（新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者）
(12)　評論（芸術活動に対して、活字等によって批評を行うことで芸術活動を支える芸術評論家等）

３　賞の対象

（１）　賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
（２）　芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門２名以内を原則とする。
（３）　芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門２名以内を原則とする。

４　選考の時期

選考は、毎年、原則として１月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前々年の１２月から前年の１１月までの間にあげられたものとする。

５　選考方法

（１）　文化庁長官は、実演家、専門家及び学識経験者の中から各部門の選考審査員及び推薦委員を委嘱する。ただし、評論部門には推薦委員を設けない。
（２）　各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦する。ただし、芸術振興部門及び評論部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも推薦することができるものとする。また、美術Ａ部門及び美術Ｂ部門の推薦委員は、美術Ａ・Ｂ部門のいずれにも候補者を推薦できるものとする。
（３）　各部門の選考審査員を構成員とした選考審査会を設置し、審査を行う。
（４）　文部科学大臣は、選考審査会における審査結果を尊重して、受賞者を決定する。

6　実施細則

芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項は、文化庁次長が別に定める。

芸 術 選 奨 実 施 細 則

平成１１年　５月１３日
文　化　庁　次　長　決　裁
一部改正平成１３年　１月　６日
一部改正平成１５年　４月　１日
一部改正平成１６年　４月　１日
一部改正平成１９年１２月２６日
一部改正平成２４年　４月　１日
一部改正令和　５年　４月　４日

１　趣旨

この細則は、芸術選奨実施要項（令和５年４月４日文部科学大臣決定）６の規定に基づき、芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項を定める。

２　選考対象者

選考に当たっては、下記のことに留意する。

（１）　過去に芸術選奨文部科学大臣賞又は同新人賞を受賞した者は、同一部門の同種の賞については対象としない。

（２）　文化功労者、日本芸術院会員、重要無形文化財（各個認定）保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者については対象としない。

（３）　当該年の業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等の過去の業績等も勘案するとともに、物故者は対象としない。

（４）　受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は７０歳未満、新人賞は５０歳未満とする。

（５）　受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

３　賞の対象にかかる補足事項

（１）　実施要項２（11）芸術振興部門において定める「新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次の者をいう。

①新たな芸術分野を創造し、又は普及させるなど著しい貢献のある者

②複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者

③他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内若しくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

（２）　実施要項３（３）に定める「新人の芸術家等」とは、次の者をいう。

①活動の期間及び実績が比較的少ないこと。

②今後活躍が大いに期待されること。

４　その他

（１）　選考審査員及び推薦委員の任期は１年とする。ただし、再任を妨げない。

（２）　選考審査員及び推薦委員は、次に掲げるものに該当すると自ら判断する場合又は選考審査会等において判断された場合は、推薦及び選考に参画しないものとする。

①親族関係又はそれと同等の親密な個人的関係

②選考の対象である活動を企画した者である場合

③選考の対象である活動の指導を行う者若しくは出演者又は出品者である場合

④密接な師弟関係

⑤上記①から④に掲げるもののほか、利害関係を有すると考えられる関係

（３）　選考過程については、非公開とする。又、選考審査員及び推薦委員は、選考に関して知り得た秘密を漏らしてはならない。選考審査員及び推薦委員でなくなった後においても、同様とする。

（４）　文部科学大臣は、被表彰者としてふさわしくない非行行為、被表彰者に係る提出書類に不実又は虚偽の記載の事実が判明した時は、被表彰の決定を取り消すことができる。

令和6年度（第75回）芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】	
犬丸　治	演劇評論家
古城　十忍	劇作家、演出家
小玉　祥子	演劇ジャーナリスト
児玉　信	藝能学会副会長、邦楽プロデューサー
伊達　なつめ	演劇ジャーナリスト
畑　律江	毎日新聞客員編集委員、大阪芸術大学短期大学部客員教授
坂東　亜矢子	演劇評論家
【映画部門】	
石飛　徳樹	朝日新聞編集委員
小川　智子	脚本家、大阪芸術大学客員教授
諏訪　敦彦	映画監督、東京藝術大学大学院教授
関口　裕子	映画評論家
根岸　吉太郎	映画監督
野村　正昭	映画評論家
渡邉　大輔	批評家、映画史研究者
【音楽部門】	
岡田　暁生	京都大学人文科学研究所教授
岡部　真一郎	音楽評論家、元明治学院大学教授
國土　潤一	声楽家、合唱指揮者、音楽評論家
齊藤　裕嗣	独立行政法人日本芸術文化振興会プログラムディレクター
千葉　優子	一般財団法人宮城道雄記念館資料室長
野川　美穂子	東京藝術大学ほか非常勤講師
舩木　篤也	音楽評論家
【舞踊部門】	
阿部　さとみ	舞踊評論家
岡見　さえ	共立女子大学准教授、舞踊評論家
織田　紘二	元国立劇場理事
亀岡　典子	産経新聞大阪本社特別客員記者
新藤　弘子	舞踊評論家
長野　由紀	舞踊評論家
望月　辰夫	舞踊プロデューサー
【文学部門】	
阿部　公彦	東京大学大学院教授
小澤　實	俳人、「澤」主宰
越川　芳明	明治大学名誉教授
小島　ゆかり	歌人
蜂飼　耳	詩人、立教大学教授
松家　仁之	小説家
若島　正	京都大学名誉教授
【美術A部門】	
加藤　弘子	平塚市美術館特別館長
萱　のり子	奈良国立大学機構奈良教育大学教授
正村　美里	岐阜県美術館副館長兼学芸部長
関　直子	早稲田大学文学学術院教授
棚田　康司	彫刻家
宮　いつき	美術家、多摩美術大学名誉教授
横山　勝彦	呉市立美術館館長

【美術B部門】	
青木　淳	建築家
川上　典李子	デザインジャーナリスト、21_21 DESIGN SIGHTアソシエイトディレクター
久保田　晃弘	多摩美術大学教授
高橋　綾子	名古屋造形大学教授
丹羽　晴美	東京都写真美術館事業企画課長
原　久子	アートプロデューサー、大阪電気通信大学教授
【メディア芸術部門】	
岡本　美津子	東京藝術大学副学長・教授
小西　利行	クリエイティブディレクター、コピーライター
谷口　暁彦	メディアアーティスト
時田　貴司	ゲームプロデューサー、東京藝術大学大学院特別教授
東村　アキコ	漫画家
藤津　亮太	アニメ評論家
三河　かおり	京都精華大学教授
【放送部門】	
安部　裕	日本大学芸術学部教授
伊藤　純	プロデューサー
井上　由美子	脚本家
音　好宏	上智大学教授
里見　繁	関西大学名誉教授
旗本　浩二	読売新聞文化記者
水田　伸生	演出家
【大衆芸能部門】	
佐々木　透子	intoxicate編集長
中村　真規	演芸プロデューサー、江戸文字書家
日髙　美恵	演芸ライター
安田　謙一	音楽評論家
油井　雅和	毎日新聞記者
渡邉　寧久	演芸評論家、エンタメライター
【芸術振興部門】	
小川　敦生	多摩美術大学教授
掛尾　良夫	映画ジャーナリスト、映画祭ディレクター
楫屋　一之	神奈川県立青少年センター支配人
木村　絵理子	弘前れんが倉庫美術館館長
小林　真理	東京大学教授
久野　敦子	公益財団法人セゾン文化財団常務理事
堀内　宏公	アーツカウンシル東京シニア・プログラムオフィサー
【評論部門】	
亀井　若菜	滋賀県立大学教授
鴻巣　友季子	翻訳家、文芸評論家
中条　省平	学習院大学教授
長木　誠司	東京大学名誉教授
長谷部　浩	演劇評論家、東京藝術大学名誉教授
三浦　篤	大原美術館館長

【部門内五十音順】

令和6年度（第75回）芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		
飯塚	友子	産経新聞文化部記者
児玉	竜一	早稲田大学教授
七字	英輔	演劇評論家
田草川	みずき	千葉大学准教授
田窪	桜子	演劇ジャーナリスト
出口	逸平	大阪芸術大学教授
林	尚之	演劇ジャーナリスト
氷川	まりこ	伝統文化ジャーナリスト
広瀬	依子	追手門学院大学講師
藤田	千史	川崎市アートセンターアルテリオ小劇場ディレクター
森山	直人	多摩美術大学教授
横山	太郎	立教大学教授
【映画部門】		
明智	惠子	『キネマ旬報』編集長
岡田	秀則	国立映画アーカイブ主任研究員
上倉	泉	日本大学教授
上島	春彦	映画評論家
木村	直子	読売新聞記者
金原	由佳	映画ジャーナリスト
暉峻	創三	映画評論家
畑	あゆみ	認定NPO法人山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局長
浜田	毅	協同組合日本映画撮影監督協会代表理事
矢田部	吉彦	前東京国際映画祭ディレクター
【音楽部門】		
井口	はる菜	関西外国語大学准教授
大田	美佐子	神戸大学大学院教授
小畑	恒夫	昭和音楽大学客員教授
加納	マリ	日本音楽研究家
武内	恵美子	京都市立芸術大学准教授
谷垣内	和子	邦楽評論家
塚原	康子	東京藝術大学教授
寺西	基之	音楽評論家
中村	孝義	大阪音楽大学名誉教授、音楽評論家
西田	紘子	九州大学大学院芸術工学研究院准教授
山田	治生	音楽評論家
【舞踊部門】		
稲田	奈緒美	舞踊評論家、桜美林大学教授
岡田	万里子	桜美林大学教授
加藤	繁治	企画室「日本の藝」主宰、作詞家
桜井	多佳子	舞踊評論家
祐成	秀樹	読売新聞東京本社編集委員
菘	あつこ	舞踊ジャーナリスト
富田	大介	明治学院大学教員
濱口	久仁子	早稲田大学演劇博物館招聘研究員
丸茂	美惠子	桜美林大学特任教授
宮辻	政夫	演劇評論家
村山	久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師
守山	実花	舞踊評論家
【文学部門】		
粟飯原	文子	法政大学教授
石原	千秋	早稲田大学教授
大口	玲子	歌人
辛島	デイヴィッド	早稲田大学国際学術院教授
栗木	京子	現代歌人協会理事長
齋藤	恵美子	詩人
田中	亜美	俳人
沼野	充義	東京大学名誉教授
野崎	歓	放送大学教授
堀江	敏幸	作家、早稲田大学教授

【美術部門】		
小谷	元彦	美術家、彫刻家
小林	桂子	日本工業大学准教授
齋藤	芽生	画家、東京藝術大学教授
佐藤	時啓	東京藝術大学教授
沢村	澄子	書家
清水	穣	同志社大学教授
関	康子	編集者、NPO法人建築思考プラットフォーム理事
滝沢	恭司	町田市立国際版画美術館学芸員
出原	均	アーツ前橋館長
成実	弘至	京都女子大学教授
服部	浩之	キュレーター、東京藝術大学准教授、国際芸術センター青森館長
花井	久穂	東京国立近代美術館主任研究員
松永	真太郎	横浜美術館主席学芸員
宮永	愛子	美術家
山名	善之	東京理科大学教授
【メディア芸術部門】		
今井	晋	ゲームジャーナリスト
小野	朋子	新千歳空港国際アニメーション映画祭実行委員会チーフディレクター
菅野	博之	まんが家、神戸芸術工科大学教授
須川	亜紀子	横浜国立大学教授
高瀬	康司	アニメーション研究者
土屋	綾子	編集者
中村	育美	ゲームクリエイター
野中	モモ	ライター、翻訳者
横井	周子	マンガライター
若見	ありさ	アニメーション作家、東京造形大学准教授
【放送部門】		
磯山	晶	ドラマプロデューサー
入江	たのし	メディアプロデューサー
岡田	惠和	脚本家
桜井	聖子	プロデューサー
佐野	亜裕美	ドラマプロデューサー
武田	和	公益財団法人川喜多記念映画文化財団代表理事
中町	綾子	日本大学教授
藤田	真文	法政大学教授
吉川	邦夫	演出家
吉村	ゆう	シナリオライター、劇作家、演出家
【大衆芸能部門】		
市川	誠	編集者
大友	浩	演芸研究家、文筆家
香取	良彦	作編曲家、演奏家
川崎	浩	毎日新聞社客員編集委員
長井	好弘	演芸評論家
中西	らつ子	イラストレーター
布目	英一	横浜にぎわい座館長、チーフプロデューサー
萩原	健太	音楽評論家
濱田	元子	毎日新聞論説委員兼学芸部編集委員
原田	和典	音楽評論家
松尾	美矢子	演芸ライター
村尾	泰郎	音楽評論家
【芸術振興部門】		
さやわか		評論家、漫画原作者
樋口	尚文	映画評論家、映画監督
廣川	麻子	NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長、東京大学先端科学技術研究センター特任研究員
堀	朋平	住友生命いずみホール音楽アドバイザー
渡辺	弘	岡山芸術創造劇場劇場長兼プロデューサー

【部門内五十音順】

別紙

運営事務局（株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
事業共創部 コンベンション第一事業局 営業第一課）宛
（E-mail： sensho_bunka@jtbcom.co.jp、TEL：080-5908-3247）

令和６年度（第 75 回）芸術選奨贈呈式・祝賀会　取材申込書

令和７年３月７日（金）１２：００必着

項目	記入事項
１ 代表者氏名	
２ 代表者ふりがな	
３ 所属先名	
４ 部署・番組名	
５ 参加人数	（名）
６ 種別	□ペン　□スチール　□ムービー
７ 受賞者への個別取材	□個別取材希望あり　□個別取材希望なし
８ 個別取材希望対象者名 （※「個別取材希望あり」	
９ ご連絡先（Tel）	
１０ ご連絡先（Mail）	
１１ 備考	

※本申込書に記載された個人情報は、本式典の参加者の把握及び緊急連絡先のみを目的として使用し、厳重に取扱うものとします。

※複数人申し込まれる場合は、代表者が人数分お申し込みください。

※受賞者の都合等により、個別取材をお受けできない場合もございますので、ご了承ください。